



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウォルター・スコットとロシア・ロマン主義文学
Author(s)	金沢, 美知子; Kanazawa, Michiko
Citation	スラヴ研究, 36, 1-19
Issue Date	1989
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5177
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113296.pdf



ウォルター・スコットとロシア・ロマン主義文学

金 沢 美知子

Φ. M. ドストエフスキイの初期の長編小説『ネートチカ・ネズワーノワ』の第七章冒頭部に、多感な少女ネートチカが秘密の手紙を発見する、実に印象的な場面がある。

わたしは図書室に入り（それはわたしにとって永久に記憶に残る瞬間でした）、ウォルター・スコットの『聖ロナンの鉱泉』を手に取りましたが、それはわたしのまだ読んでいない唯一の小説でした。いまでも覚えています、突き刺すようなとらえどころのない憂愁が、まるでなにかの予感のようにわたしを責めさいなむのでした。わたしは泣きだしたくなりました。部屋のなかは、高い窓から差しこむ夕陽の最後の光線が光り輝く寄木細工の床に斜めにさんさんと降り注ぎ、まぶしいほど明るく、ひっそりと静まり返っていて、両隣の部屋にもやはり人の気配はありませんでした¹⁾。

ドストエフスキイの文学には馴染みの、繊細で病的な神経の持主ネートチカの「予感」は現実のものとなった。彼女はこの直後、『聖ロナンの鉱泉』（St. Ronan's well, 1823）の中に、まだ年若い養母アレクサンドラ・ミハイロヴナに宛てて書かれた長い恋文を発見するからである。手紙にはC. O. とだけ署名されており、差出人は不明であった。こうして、物語を解き明かす鍵とも言うべき恋文を長い間潜ませていた『聖ロナンの鉱泉』の名は、否応なく読者の記憶に刻み込まれてしまう。

とはいえ、この場面（ネートチカは養父母の家の図書室で本を読んでいる）にスコットの本が登場すること自体は、別段奇異なことではない。ドストエフスキイの幼少期に当たる19世紀20年代、30年代のロシアでは、スコットの作品または選集が知識人の家庭の書架に並べられているのは、ごくありふれた光景だったからである。作者は、アレクサンドラが家庭が内に崩壊の危機を秘めながらも表面的にはそうした一般的な家庭と何の差異もないことを描くための、いわば小道具として、スコットの小説を持ち出したとも言えよう。

アレクサンドラ・ミハイロヴナの家庭の書架に着想を得て、本稿では、1820・30年代のロシアでスコットの作品が愛読された経緯を調べ明らかにした。そして、スコットを愛してやまなかった作家ドストエフスキイの目に、スコットの文学はどのようなものとして映ったのか、考察した。

I W.スコットとその時代

ウォルター・スコット（1771～1832）の創作活動の時期は、ほぼ19世紀初頭の三十年間

である。この間に、彼は詩、小説、評論、伝記物を手掛ける傍ら、スウィフト全集やドライデン全集の編集校訂、百科事典の項目執筆など様々な仕事に携わった。彼は、ドイツ詩人ゴットフリート・ビュルガーの詩とゲーテの戯曲『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』の翻訳出版の後、M. G. ルイスの「奇談集」の為に書いた原稿の中から『聖ヨハネ祭の前夜』(The Eve of Saint John: A Border Ballad)を1800年に出版し、英国詩壇にデビューした。その後、三大物語詩『最後の吟遊詩人の歌』(The Lay of the Last Minstrel, 1805), 『マーミオン』(Marmion, 1808), 『湖上の美人』(The Lady of the Lake, 1808)を発表し、当代随一の詩人として、名声を欲しいままにしていたが、1812年にバイロンが『チャイルド・ハロルドの遍歴』で一躍有名になるに及んで、人気は彼からバイロンに移っていく。この頃からスコットは活路を小説に求めるようになり、1814年には『ウェイヴァリー』(Waverley)を匿名で発表し、爆発的な売行きを見た。その後、最初は「ウェイヴァリーの作者」の名で、後には自らの名を公表して、最晩年に至るまで小説作品を書き続け、この分野で自らの才能を大きく開花させたのである²⁾。

ウォルター・スコットは近代における歴史小説の創始者であり、また、文学史上、ロマン主義を代表する作家のひとりと考えられている。第一の点に関しては評価が定まっているが、第二の点に関しては異論も見られる。例えばルカーチは『歴史小説論』の中でスコットに一章を捧げて、この作家の非ロマン主義的特質を繰り返し力説している³⁾。もともとロマン主義は、狭義にとるか広義にとるかで文学史家たちの意見が分かれ、常に論議的となってきた。その上、英・独・仏、更には短期間に集中的に多様な文学潮流の影響を受けたロシアなど、文化背景の相違もあり、単一の概念規定を行うのが難しい。ただ、当時の読者がスコットの作品の中に超自然的なものへの志向を認めたのは事実で、彼の文学が時代のロマン主義的風潮と無縁でなかったのは確かである。

まさに、スコットの文学、とりわけ彼の歴史小説は1810年代から30年代のヨーロッパで最も人気を博していた読物のひとつであった。エディス・バークヘッドが『恐怖小説史』で指摘しているように⁴⁾、スコットのウェイヴァリー小説の登場は、19世紀初頭におけるM. G. ルイスやC. R. マチュリン等のゴシック・ロマンスの隆盛に影を落としたのである。彼の作品は英国だけでなく諸外国、特にフランス小説界を長きにわたって支配し続けた。また読者大衆のみならず、作家たちにも多大の影響を与え、数多くの模倣者を生み出して、文学における小説ジャンルの発展に大きな貢献をなしたのである。例えばティボーデは、『フランス文学史』の中で、「メリメはウォルター・スコット流の長編小説『シャルル九世在位年代記』を書いた⁵⁾、バルザックはスコットの影響下に「はじめて彼らしくなり、バルザック主義に目ざめた⁶⁾」、若きユゴーはスコットから「靈感」を得、彼の『ノートル=ダム』はウォルター・スコットがなければ存在しなかったと同じ⁷⁾」である、「バルザック、サンド、スウリエがスコットを継承し⁸⁾」た等、スコットが様々な作家に影響を与えたことを指摘している。これらの指摘を通して、当時の読書界で、スコットの小説が、〈バイロン流〉〈ポール・ド・コックばり〉等と並んで、ひとつの明確な作風を示していたことも知れるであろう。

このように歴史を題材としたスコットの小説が愛読された背景には、歴史そのものに対

して一般の人々の関心が高まったという事情がある。ルカーチは、フランス革命、ナポレオン戦争、及びそれが波及して生じた各地での民族的抵抗、民族独立の動きが、「ヨーロッパ的な規模での」、「大衆的な歴史体験⁹⁾」を惹き起こし、それが歴史に対する生活レベルでの関心を人々のうちに呼び覚ました、と推論している。「1820年以来現われた、ウォルター・スコットの小説などに育まれた歴史に対する当時の一般的趣味¹⁰⁾」という、ティボーデの叙述は、歴史志向とスコット人気の分離し難い関係を教えてくれるのである。

Ⅱ パナーエフの回想、ロシアのスコット熱

ロシアでウォルター・スコットが愛読されたことについては、パナーエフが『文学的回想』の中で繰り返し証言している。

十五の頃から、私は、読書と文学に情熱を傾けるようになった。私は快いおののきを感じながら、むさぼるように、当時のあらゆる不定期文集、殊に「北の花」を読み、ウォルター・スコットの小説、個々に発表された「オネーギン」のいくつかの章、「モスクワ電信」の中の論文数篇を読んだ。〈中略〉学校当局の目をぬすみ、学科の復習をするふりをして、われわれは毎晩教室に集まってはウォルター・スコットの小説や「電信」を読んでいた¹¹⁾。

こうしたパナーエフのスコットへの情熱は、パンシオン卒業後も衰えることがなかった。

私のお気に入りの読み物といえば、わが国の雑誌、不定期文集以外では、ウォルター・スコットの小説だった。私はそれを全て、フランス語とロシア語の翻訳で読んでいた¹²⁾。

ロシアの読者へのスコットの作品の紹介は1810年代に始まり、20年代、30年代、40年代を通じて、露語訳、仏語訳が陸続と雑誌に掲載され、また単行本の形で出版された¹³⁾。このような風潮に対し、〈年次評論〉の形式の創始者、ベストウージェフ＝マルリンスキイは、『1823年度ロシア文学概観』の中で、「スコットの見事な小説数篇の翻訳が何冊か出版された。立派な翻訳もあればダメなものもある¹⁴⁾」と評しており、また、『1824年及び1825年初頭のロシア文学概観』では、「スコットの小説数篇の翻訳が何点か出たが、原本から訳出したものは一つもなく、ロシア語への直訳も極めて少ない¹⁵⁾」とこぼしている。

ギリシア・ラテン、インドの古典から「現代物」まで、様々な外国文学の翻案、名訳を残したことで知られている詩人ジュコーフスキイもまた、スコットを訳出した。1822年には抄訳「スマイルホルムの城。バラード¹⁶⁾」、1832年には、『マーミオン』の模倣的作品である『地下蔵の法廷』¹⁷⁾を発表している。

当時のロシアの読書界の外国文学需要増大の中で、スコットの作品も意欲的に移入され、例えば冒頭に引いた『聖ロナンの鉱泉』は1823年末に英国で出版され、既に1824年には仏

語訳がモスクワとペテルブルグの書店に並ぶという素早さであった。

なお、1835年にはスコットの伝記的研究アラン・カニングラム著『サー・ウォルター・スコットの生涯と作品¹⁸⁾』がД.....嬢 (Девница Д.....) によって翻訳され、ペテルブルグで出版されて、一般の関心に応えた。

ではスコットの小説の何が読者を惹きつけたのであろうか。

パナーエフはこう回想している。彼が、ユゴーの新作『ノートル・ダム・ド・パリ』を読んで熱狂し、その部分訳を『モスクワ電信』誌に送って、採用されるのを日々心待ちにしていた頃のことである。

読書への情熱が周囲の無意味で愚劣な世界の猥雑さにすっかり落ち込んでしまうことから、私を救ってくれた。ウォルター・スコットとユゴーの小説は、私の内に中世の歴史を知りたいという願いを起こさせた¹⁹⁾。

更に、ゴーゴリは文集『アラベスキ』掲載の論文「今日の建築様式」の中で、スコットによってゴシック趣味が蔓延したことを指摘している²⁰⁾。

事実、スコットは「バラードの気味悪い細密描写や生々したりズムを喜²¹⁾」んだ。説話が伝える超自然的なものを好み、しばしば城や墓場や僧院を小説の舞台とし、迷信や占いや幽霊を登場させた。スコットの『ラマームーアの花嫁』(The Bride of Lammermoor, 1819) はマチュリンの『アイルランドの首領』(1812) との類似を指摘されてきた²²⁾。スコットの作品はゴシック・ロマンスから多くのものを受け継いでいて、そこに彼特有の歴史的理解と歴史的味つけがなされており、それが読者に好まれたのである。

Ⅲ 作家の目 —— マルリンスキイ、プーシキン、ゴーゴリ、ベリンスキイ

無論、作家たちは、スコットの作品を愛で、楽しむだけでは満足しなかった。作家特有の食欲さで作品を研究し、模倣し、吸収していったのである。スコットの影響下に生まれたロシアの代表的歴史小説としては、ブルガーリンの『イワン・ヴィジギン』(1829)、ザゴースキンの『ユーリイ・ミロスラーフスキイ、または1612年のロシア人』(1829) や『ロスラヴレフ、または1812年のロシア人』(1831) が知られている。特に『ユーリイ・ミロスラーフスキイ』は大きな成功を収めて再三版を重ね、その主人公ユーリイは、マルリンスキイによれば、「スコットのウェイヴァリーの生まれかわり²³⁾」として人気を呼んだという。かくいうベストウージェフ＝マルリンスキイもスコットの強い影響を受けた作家であった。彼はロマン派の詩人として出発し、スコットと同様、小説のジャンルに作家としての活路を求めた人で、一時期、中世やロシアの民間伝承に取材した歴史物語を好んで書いた。城を舞台とした物語設定や戦闘場面の描写、超自然的な逸話などには、スコットに学んだ跡が明瞭に認められる。そのロマン主義的小説『恐ろしき占い』で、マルリンスキイはスコットの『湖上の美人』との繋がりを仄めかしている²⁴⁾。

プーシキンとゴーゴリは、単なるスコットの模倣者ではなかったが、やはり彼の影響下

に歴史小説を手掛けており、これについては既に数々の研究書の中で指摘されてきた。従って、ここでは個々の影響関係に立ち入ることを控え、幾つか彼らの生の声を通して、今少しそのスコット観に触れておくに留めたい。

プーシキンにあっては、スコットに関する言及は実に多い。スコットの名前が作品（『エヴゲーニイ・オネーギン』、『ヌーリン伯』、『書簡体小説の断章』など）に登場する場合には、人の無為の時間を埋め、人を夢中にさせる作家という意味合いで、当時の風俗を表わしていることが多い。ところでプーシキンの実生活に於ても、スコットは彼の無聊を癒した。1824年ミハイロフスコエ村に幽閉されていた日々、彼は「詩、詩、詩！バイロン、ウォルター・スコットのおしゃべり！それが魂の糧だ²⁵⁾。」と書いている。また、後年、やはりミハイロフスコエ村から、妻にあてて次のように訴えている。

村へ来てからはや二週間にもなろうというのに、君からはまだ手紙を受け取っていない。わびしいのだよ、僕の天使、詩も思いつかなければ、小説も書き直していない。ウォルター・スコットと聖書を読み、始終君のことを思っている。(1834年9月20日頃の手紙)²⁶⁾

僕はあの人たちのところからウォルター・スコットを持ってきて、読み直している。英語版を持ってこなかったのが、残念だ。(1835年9月21日の手紙)²⁷⁾

僕は温和しく、いい子にしている。歩き回ったり、馬を乗り回したり、君を思って溜息をついたりしている。(1835年9月25日の手紙)

こうしてわびしい生活をやり過ごすために、プーシキンは度々スコットの小説に助けを求めた。そこには生活人としてだけでなく、同時に作家としての気分転換を図ろうとする——詩も小説も書けない状況を打開する手段や、仕事にかかる前のイニシエーションとして——プーシキンの気持ちが窺われて、興味深い。プーシキンの著作には、スコットに関する言及が無数にあるが、概ね好意的に評価していたようで、スコットは小説を創作する為の最も有益な手本であると、考えていた。

ゴーゴリもまた、スコットに強い賞賛の念を抱いた作家であった。彼は初期より歴史志向を見せていたが、1834年9月に始まったペテルブルグ大学での中世史の講義で熱弁をふるったことはよく知られている。ゴーゴリにあって興味深いのは、彼が何よりも作家の眼差しでスコットを捉えていることである。これはプーシキンのスコット観に通じるものであろう。1836年9月22日、ジュネーヴ発、ポゴジン宛の彼の手紙には「仕事に取り掛かる前に、スコットの全作品をもう一度読み返し始めたところです²⁹⁾」という文面がある。同年の11月12日、パリ発、ジュコーフスキイ宛の手紙でも同じ内容が伝えられている³⁰⁾。時期から判断して、文面中の「仕事」とは『死せる魂』第一部を意味していると考えられる。ゴーゴリは、気晴らしの為にではなく、『死せる魂』を執筆するに当たって、スコットの小説から示唆を得ようとしたものと推測されるのである。彼は、論文「シュレーツァ、ミュラー、ヘルダー」(1832、『アラベスキ』所収)の中では、作家としての彼の目に映じたスコットの手法の特徴を、「話の巧みさと、ごく微細なニュアンスを描き出す手腕」と

表現している³¹⁾。

ところで、ゴーゴリ自身は自らの著作の中で特別に言及してはいないが、彼とスコットの間には歴史志向の他にもひとつ、大きな共通点が見られるのである。即ち、それはスコットがスコットランドという地方色を携えて英国文壇にデビューしたように、ゴーゴリもウクライナ物語によって初めて、名声を得たことである。(それ以前に処女出版した『ガンツ＝キューヘリガルテン』は注目されぬまま、作家自身によって回収され、焼き捨てられた。)これは単に、作家の側だけでなく、受容する読者側の問題でもあった。英国にとってのスコットランド、ロシアにとってのウクライナは、共に強烈な地方臭を持ち、民間伝承の宝庫であり、幻想的な〈異郷〉であって、読者の想像力を大いに刺激するものであった。当時の読者は神秘的なもの、幻想的なものに目がなかったから、スコットのスコットランド、ゴーゴリのウクライナにそうした〈異郷〉を嗅ぎ取って、飛びついたのはいうまでもない。ゴーゴリはスコットの影響下に歴史物を手掛け、中世といういわば時間的〈異郷〉を作品の中で描いたのであったが、それに加えて、自らの郷里であるウクライナを主題とすることによって、自ずと、空間的〈異郷〉を読者に供給することになった。〈ウクライナ物語〉の成功に自己の作家生命をかけていたゴーゴリのことである、この辺りの読者心理や時代の嗜好に無頓着であった筈がないのである。

ベリンスキイは時代の動向に明敏な批評家であったから、ウォルター・スコットに関する言及も数多く残している。先に触れた、アラン・カニング著『サー・ウォルター・スコットの生涯と作品』の翻訳に関する長い論文(1835)の中で、彼は、スコットの文学の本質が歴史と虚構、現実と幻想の見事な融合にあるとし、スコットの作品の幻想性を高く評価した。

この巨大で慎ましい天才の作品を知らぬ者がいるだろうか。彼は文学界のコロンブスであり、飽くことなき芸術趣味のために、文学の楽しみの汲めど尽きせぬ源泉を発見したのである。彼は芸術に新しい手段をもたらして、それに新しい威力を与え、時代の要求を察して、現実と虚構(действительность с вымыслом)を結合し、人生と空想(жизнь с мечтою)を和解させ、歴史と詩(историю с поэзией)を調和させたのである。彼の様々な作品を読まなかった者、また、読み返さなかった者がいるだろうか?そこでは中世が立上り、動き、そして完き生命に充ち溢れ、魔法の影絵(волшебной фантасмагории)の明暗様々な光線に輝きながら、我々の前を通り過ぎていったのである³²⁾。

1835年という、まだベリンスキイがロマン主義文学に寛容だった時期に、こうした発言が見られるのは何ら不思議はない。だが、1843年の「マルケーヴィチ著『小ロシアの歴史』への論文³³⁾」や1845年の「ウォルター・スコットの『アンティークエリイ』への評論³⁴⁾」の中でも、変わることなく、スコットの幻想的要素、「歴史と詩の出会い」を評価していることには、些か驚かされる。晩年の彼は、フランスの熱狂派やロシアのマルリンスキイ、初期のドストエフスキイなどに代表される、情熱と幻想のロマン主義文学を激しく否定し

たからである³⁵⁾。

ともあれ、19世紀前半のロシアの読書界はスコットの文学の中に幻想的〈異郷〉を認めて、狂喜し、それとパラレルに、当時の文壇は読者を狂喜させるそうしたスコットの作風に大いに学んだのであった³⁶⁾。

後年、文学史家スローニムはゴーゴリの『タラス・ブーリバ』へのスコットの影響を指摘するに当たって、「ロマン派はウォルター・スコットに導かれて、英雄的な過去や民族の伝統を〈再現〉しようとした³⁷⁾」と述べ、トルストイの『戦争と平和』との相違を明らかにすべく、ウォルター・スコットやアレクサンドル・デュマの歴史小説の中に、ロマン派に特有のけばけばしいもの、華麗で複雑なもの、英雄的なもの、理想的なものへの嗜好が認められることを指摘している³⁸⁾。

更に、「私はウォルター・スコットからフランス・ロマン主義者たちに進み、彼らのものをむさぼるように読んでいた³⁹⁾」という、パナーエフの回想にも見られるように、スコットの小説とフランス・ロマン主義文学は屢々同質のものと理解された。マルリンスキイはフランスの熱狂派に心酔し、自らもロシアでロマン主義的作風を確立して、パナーエフ等の多くの崇拜者を持っていたが、かなり早い時期からフランス文学に劣らず（それ以上ではないにしても）イギリス文学を愛読したことは、あまり知られていない。その彼が好んだのは、英国文壇の中でもバイロンとスコットの二人の作家で、スコットの詩の音楽性を高く評価していたという⁴⁰⁾。

このようなスコット理解は決して理由のないものではなかった。まず、スコットの作品は、露語訳に次いで、仏語訳で読まれることが多かった。そして、それ以上に、スコットとフランス・ロマン主義文学の間にはもっと有機的な関係があり、深い教養と確かな判断力の持主であったプーシキンは、スコットの文学がフランスに新しい流派を引き起こしたと考えていた。スコットの作品を、ロマン主義文学の中でも特にフランスのそれに近いものとして受け容れたのは、当時の文壇の一般的傾向だったのである⁴¹⁾。

Ⅳ 遅れてきたロマン主義作家 ドストエフスキイのスコット体験(1)

Φ. M. ドストエフスキイはまさに、そうしたロマン主義的熱狂に支配された文学的風潮の中で、幼年期を過ごした。この時期に若く柔軟な感受性で受けとめた書物の数々は、〈遅れてきたロマン主義作家〉ドストエフスキイの生涯に払拭できぬ刻印を残すことになったのである。

グロスマン編集の『ドストエフスキイの蔵書目録』には、『パースの美少女』(The Fair Maid of Perth, 1828) (露語訳)、『修道院』(The Monastery, 1820) (仏語訳)、『ウェイヴァリー』(仏語訳)、『アイヴァンホー』(Ivanhoe, 1819) (仏語訳)の四つのスコットの作品が挙げられている⁴²⁾。無論、ドストエフスキイが手にとった作品はこの四つに留まらなかった。

ドストエフスキイは幼い頃から歴史に対して強い関心を抱いていたが、それはドストエフスキイ家の家庭環境によるものでもあった。弟アンドレイは、当時のドストエフスキイ

金 沢 美知子

家の家庭朗読会をこう回想している。

私の記憶によると、この朗読のときには、兄たちも寄宿学校に入学する以前はいつも同席していて、のちには、両親が読むのに疲れると、兄たちがかわって朗読したものであった。そこで読まれたのは、主として歴史の本だった⁴³⁾。

またアンドレイは次のように証言している。

兄フォードルがウォルター・スコットの『クウェンティン・ダーワード』、『ウェイヴァリー』を手に持っていたのを、わたしはよく見かけたものである。家には私家版の本があって、フォードルは読みにくい、古くさい翻訳だったにもかかわらず、それらの本を何度も何度も繰り返し読んだものだった⁴⁴⁾。

幼児期に培われたスコットへの関心はドストエフスキイが生家を離れ、ペテルブルグへ出てからも、衰えることがなかった。アンドレイは一時、ペテルブルグで、兄フォードルが（友人トットレーベンと二人で）借りていた住居に身を寄せていたことがあり、この頃のことを、

そのころから、わたしは雑誌や本を欠かさず読むようになった。兄のすすめで、古い本のなかからウォルター・スコットの作品を全部読んだのもそのころである⁴⁵⁾。

と述べている。やはり同じ頃、工兵学校でドストエフスキイの学友だったグリゴローヴィチが、

わたしが最初に読んだ、ロシア語に翻訳された文学作品は、ドストエフスキイから教えてもらった小説だった。それはホフマンの『牡猫ムル』と、暗い内容の小説で、そのころドストエフスキイがひじょうに高く評価していた、マチュリンの『アヘン常用者の告白』であった。ウォルター・スコットの『星占い者』や、とりわけクーパーの『オンタリオ湖』が、わたしを最終的に読書に熱中させる契機となった⁴⁶⁾。

と回想している。グリゴローヴィチ自身の読書体験は別にして、ドストエフスキイのスコットに対する関心が依然続いていたことがわかるのである。残念ながら、この時期の伝記的資料で、スコットに関するドストエフスキイ自身の言及はあまり残されていない。1845年5月4日付、兄宛の手紙の中で、スコットの『マナリング』(Guy Mannering, 1815)に触れているぐらいである⁴⁷⁾。ただ、これはドストエフスキイがスコットを読まなかったためではなく（これについては先に見たように同時代人が証言している）、ドストエフスキイにとってはスコットの作品を読むことがもはやごく当り前のことになっており、親近者との間で、殊更に話題にする必要がなかったためと考えられ、従って後に引く

ように、晩年になってから回想のような形で触れられることになるのである。

確かに、ドストエフスキイは歴史に深い関心を寄せてはいたが、歴史小説という側面からだけでなく、別の観点からもスコットの作品を愛していた。

彼の初期の美しい短篇小説『白夜』に次のような場面がある。主人公の「夢想家」(=「わたし」)がナースチェンカを前に、夢想家の本性を描き出してみせる件りである。

あなたはもしかすると、彼は一体何を夢想しているのか、と訊ねるかもしれません。でも、そんなことを訊ねて何になるでしょう！ ありとあらゆることを夢想するんですから……初めは不遇で、後に月桂冠を授けられた詩人の役割とか、ホフマンとの交友とか、聖バーソロミューの夜とか、ダイアナ・ベルノン^①、イワン雷帝のカザン占領時の英雄的な役割とか、クララ・モーブライ^②、ユーフィア・デンス^③、大僧正の会議と彼らの前に立つフス、いや、歌劇『ロベール』の中の亡者どもの一揆とか（あの音楽を覚えていますか？ 墓場の臭いがするじゃありませんか！）、ミンナとブレンダ、ベレジナ河の戦闘、B. Д. 伯爵夫人のサロンでの詩の朗読とか、ダントン、クレオパトラとその恋人、コロムナの小さな家とか、片隅にある自分のねぐらとか、それから冬の晩に可愛い少女が小さな口をポカンと開け、大きな眼を見開いて自分の話を聞いているとか、ちょうど今のあなたがぼくの話の聞いているようにね、ぼくの可愛い天使……⁴⁸⁾」

この引用部分には興味深い点が二つある。まず第一に、ドストエフスキイ研究者 V. テラスの言葉を借りれば、それは、スコットの小説やホフマンの『ゼラピオン兄弟』など、「ロマン主義的作品のカタログ⁴⁹⁾」である。アカデミー版三十巻のドストエフスキイ全集では、これらの文学的形象のひとつひとつに註が付されていて興味深い。①はスコットの『ロブ・ロイ』(Rob Roy, 1817)の、②は『聖ロナンの鉱泉』の、③は同じくスコットの『ミドロジアン的心臓』(The Heart of Midlothian, 1818)の主人公である。スコットの主人公たちも含め、これらの文学的形象は絢爛たる幻想の世界を織りなしている。

次に、一見してわかるように、歴史的事件と文学的(虚構の)形象が渾然一体化している。果たして「夢想家」の脳裡では、歴史と虚構は区別されているのであろうか。ここで思い出されるのは、前掲のベリンスキイの評論である。彼はスコットの文学に歴史と幻想の融合を見た。しかしながら、スコットにあっては、歴史自体が虚構であり幻想であることが、「夢想家」の告白から髣髴としてくるように思われるのである。少なくとも「夢想家」にこう語らせたドストエフスキイは、そのように理解していたと推察される。

なお、ドストエフスキイは初期の作品を後年出版するに際し、概して、(主として叙述の簡潔化を目的として)文章を削除する傾向にあったが、ここでは逆の作業を行っている。1848年、『祖国雑記』12号に初めて発表された時の『白夜』には、この引用部分はなかったが、1860年、作品集に収録するに当たってわざわざ挿入したのである。彼としては珍しい試みで、「夢想家」の性癖を一段と明確化しようとする意図が感じられ、また、それだけに、これらの文学的形象は念入りに選びぬかれたものと考えられ、大変興味深い。

V 遅れてきたロマン主義作家 ドストエフスキイのスコット体験(2)

以上、ドストエフスキイが、歴史物としてのスコットの文学に関心を持ったことと幻想的な題材に惹かれたことは、概ね、1820年代、30年代の読書界の嗜好に同調するものであった。ところが、それらと並んで、看過できないのは、彼がスコットの文学の教育的価値を極めて高く評価していたことである。

同じ『白夜』に、ナースチェンカが自分の生活を「夢想家」に語って聞かせる場面（「ナースチェンカの物語」）がある。その中の、彼女の家の下宿人（この男は後に彼女の恋人となる）が彼女にフランス語の本を貸し与える件りを引いておこう。

おばあさんは言うのです。

『あたしもね、そういう本をたくさん読んだけれど、みなとてもきれいに書いてあるものだから、夜どおし坐ったまま、こっそり読んだものだよ。だから、ナースチェンカ、お前もお気をおつけ、そんな本を読んじゃいけないよ。ところで、あの人は一体どんな本をよこしたんだい？』

『ウォルター・スコットの小説ばかりよ、おばあさん』

『ウォルター・スコットの小説だって！ そんならいいけれど、ただそこに何か仕掛けでもありゃしないかい？……（略）』

〈中略〉

こうして、あたしたちはウォルター・スコットを読み始め、一月ほどのうちにおよそ半分を読み終えてしまいました⁵⁰⁾。

それから暫くして、ナースチェンカは階段でばったり下宿人と出会い、言葉を交わす。

『どうです、本は読みましたか？』って言うんです。『読みました』とあたしが答えると、『それじゃ、何が一番気に入りましたか？』と訊くんです。そこであたしは『「アイヴァンホー」とプーシキンが一番気に入りました』と言いました⁵¹⁾。

『ネートチカ・ネズワーノワ』でもやはり、養母のアレクサンドラ・ミハイロヴナが十六才になったネートチカに『アイヴァンホー』を読ませている。

まる二週間というもの、彼女はあれこれと準備し、わたしを試験しては、わたしの成長の程度や欲求の程度を調べているようでした。ついに、彼女はわたしの教育にとりかかろうと決意し、わたしたちの机の上にはウォルター・スコットの『アイヴァンホー』が現われましたが、それをわたしはずっと以前に少なくとも三回は読み返しておりました⁵²⁾。

またしてもスコット、またしても『アイヴァンホー』であるが、ともあれ、アレクサン

ドラはネートチカと共にこの作品を読み、受けた印象を語り合うことにより、ネートチカが「長足の進歩をとげていた」ことに満足したのであった。

初期作品の中に、これらの少女たちのいわば〈教育書〉として登場させたスコットの小説を、ドストエフスキイは実生活に於ても、子供に与えるべき本として、熱心に勧めた。1880年12月19日付、『作家の日記』の読者と覚しき H. A. への手紙である。

ご息が歴史を好きになったら、きわめて結構です。ソロヴィヨフ、シロッセルの世界史、そのほかプレスコットの『メキシコ征服』や『ペルー征服』といったたぐいの、個々の歴史著作を読ませる事です。最後に、ウォルター・スコットやディケンズを翻訳で読ませるといいでしょう、もっともこれらの翻訳は入手が非常に困難ですが。〈中略〉

ご息が十六才以下であれば、理解できるかできないかという疑問だけを選択の指針として、今あげたこれらの本を選んで与えることです。理解できそうなら、読ませて下さい。ディケンズとウォルター・スコットは十三才の子供にももう与えてかまいません⁵³⁾。

また1880年8月18日には、同じく『作家の日記』の読者と思われる H. JI. オズミードフへ宛てて、恐らく相手の相談に応じてのことであろう、こう書き送っている。

お言葉によると、あなたは、空想力を育てることを恐れて、いまだにお嬢さんに何か文学的なものは読ませぬようになさっている由。わたしには、それはまったく正しいとは言えぬような気がします。〈中略〉

十二才の時には、休暇中に田舎でウォルター・スコットを全部読破しましたし、かりにわたしが自分の空想力と感受性を発達させたとしても、その代りわたしはそれをよい方向に向け、わるい方向にはむけませんでした。〈中略〉

あなたにも、今からお嬢さんにウォルター・スコットを読ませるよう、おすすめします。まして、この作家はわれわれロシア人の間ではまったく忘れられていますし、それにやがて、もはや自立して生きようになれば、お嬢さんもう自分からこの偉大な作家を知る可能性も必要性も見いださなくなるでしょうから、なおのことです。ですから、お嬢さんが親の家におられる間に、この作家を知らせる汐時を捉えることです。ウォルター・スコットは高度な教育的意義を持っています⁵⁴⁾。

残念ながら、ドストエフスキイは「高度な教育的意義」(высокое воспитательное значение)という言葉にそれ以上具体的な説明を与えていない。しかし、『白夜』、『ネートチカ』やこれらの手紙を通して我々はドストエフスキイの考えをある程度推察することができるように思われる。即ち、彼はスコットの文学の中に、若い知性と感性を発達させる為の二つの要因——空想力を刺激し助長する働きと、その空想力を正しい方向へ調整する働き——を認めていたのである⁵⁵⁾。

また、この二つの働きが、とりもなおさずスコットの文学の二つの特質——超自然的なものへの愛と、それを見据える冷静な眼差し——に根差したものであることを、ドストエフスキイははっきり感じとっていたのであろう。ものを見据える冷静な目とは選ばれた作家の条件である。この点からも、ドストエフスキイは作家としてのスコットに変わることなき信頼を寄せたのであって、それはスコットとプーシキンに等しい評価を与えたことの中にも証されているであろう。同時代の興奮の渦の中で、スコットのロマン主義的側面にのみ目を奪われていたパナーエフ輩との差異がそこにある。しかも、彼は『白夜』（1848）、『ネートチカ』（1849）の執筆の時期に、既に明確にスコットのそうした特性を把握していた。そして、1880年代という、既にロマン主義文学の惹き起こした興奮が昔日のものとなり、スコットが過去の偶像と化した時代になっても、なおかつ、彼のスコットへの視点は微動だにしなかったのである。

* * * * *

ウォルター・スコットは中世という「過去」を描いて読者を魅了し、19世紀前半の一時期、ヨーロッパの文壇を先導した。彼の「過去」（即ち、時間的〈異郷〉）は、読者にとって、現実から逸脱し、自己から飛翔するための恰好の口実となった⁵⁶⁾。やがて読書界はそうした外面的〈異郷〉に飽き足らず、より内面的な解放を求めて、「過去」から「現代」へと関心を移してゆく。ロシアも例外ではなかった。大家プーシキンやゴーゴリから時代の推移と共に忘却されてしまったマルリンスキイ、ザゴースキンに至るまで、当時の多くの作家たちが、歴史小説の洗礼を受けた後、再び現代社会に題材を求めるようになった。スコット自身もまた、「過去」という枠を離れ、『マナリング』、『ミドロジアンの心臓』など、「現代」社会を舞台とする傑作を生み出したのである。ロマン派詩人として出発し、「歴史」を通して小説家に变身したスコットの文学は、19世紀20年代から40年代に於ける小説という文学ジャンルの生きざまを代弁していると言ってもよいだろう。いわば〈遅れてきたロマン主義作家〉として「時代」に参加したドストエフスキイには、スコットの文学のそうした多面性と歴史的役割がしっかり見えていたようである。

孤児ネートチカが身を寄せていた（アレクサンドラ・ミハイロヴナの）家庭の書架にスコットの『聖ロナンの鉱泉』が並べられていたのは、時代の風潮を反映するものであった。だがネートチカに、数ある蔵書の中から『聖ロナンの鉱泉』を選ばせた（しかも『アイヴァンホー』に続いてのスコットの再登場である）ひとつには、スコットに対するドストエフスキイの愛情もあったように思われる。

作家が流刑になったため、『ネートチカ』はこの第七章をもって中断され、手紙の差出人C. O.の正体も明かされぬまま、物語はディケンズのあの未刊の名篇『エドゥイン・ドルードの謎』同様、永遠の迷宮入りとなってしまった。秘密結婚や肉親殺しなど、多くの犯罪と謎を含み、錯綜したプロットを持つ『聖ロナンの鉱泉』は、『ネートチカ』に於てどのような役割を果たす予定であったのか。今となっては作者に問うこともかなわない。スコットのこの書を手掛かりに物語の謎を解き明かすという心浮き立つ作業は、残念ながら別の機会に譲りたいと考える。

— 注 —

再出の文献に関しては、著者名で略示する。同一著者に複数の著書がある場合には著者名と著書の冒頭部分で示してある。

//は所収を意味する。

- 1) Ф. М. Достоевский, *Пол. соб. соч. в 30 томах*, Л., 1972, т. 2, с. 239.
本稿でのドストエフスキイの著作からの引用は、新潮社版『ドストエフスキイ全集』(全27巻)に依った。(一部、訳を変えてある。)
- 2) ウォルター・スコットの小説作品に関しては、下記の全集を参照した。
Sir Walter Scott, Waverley Novels, The Border Edition, ed. by Andrew Lang, 24 vols., London, 1901.
Vol. 1の巻末に List of volumes が付されている。
なお、原作とロシア語訳のテキストでは、屢々、作品名にかなりの相違が見られる。従って、両者を比較し同定する為に、次のロシア語訳スコット全集を参考にした。
Вальтер Скотт, Соб. соч. в 18 томах, С.-Петербург, 1898-1899.
- 3) 『ルカーチ著作集』(全13巻別巻1), 第3巻(『歴史小説集』), 白水社, 1969年。
- 4) エディス, バークヘッド『恐怖小説史』(安藤泉 他訳), 牧神社, 1975年, 314頁。
- 5) A. ティボーデ『フランス文学史』(辰野, 鈴木監修), 角川文庫, 1960年, 中巻24頁。
- 6) 同書, 中巻35頁。
- 7) 同書, 中巻80頁~81頁。
- 8) 同書, 中巻80頁。
- 9) ルカーチ, 前掲書, 33頁, 36頁。
- 10) ティボーデ, 前掲書, 上巻278頁。
- 11) И. И. Панаев, *Литературные воспоминания*, М., 1988, с. 34.
- 12) *Там же*, с. 57.
- 13) 既に1820年代にはスコットの名はロシアに遍く知れわたり、彼のほぼ全ての小説作品に加え、幾つかの物語詩(1823年に『最後の吟遊詩人の歌』, 1827年に『島の領主』(The Lord of Isles, 1815)……)が(時には伝語からの重訳で)訳出された。
См: Ф. М. Достоевский, *Письма в 4 томах*, М.-Л., 1928, т. 1, с. 480 (примечания А. С. Долинина).
- 14) А. А. Бестужев (Марлинский), *Взгляд на русскую словесность в течение 1823 года*// А. А. Бестужев-Марлинский, *Сочинения в 2 томах*, М., 1958, т. 2, с. 541.
- 15) А. А. Бестужев, *Взгляд на русскую словесность в течение 1824 и начале 1825 годов* // *Там же*, с. 552.
- 16) В. А. Жуковский, *Пол. соб. соч. в 3 томах*, Петроград, 1918, т. 1, с. 300-302.
- 17) *Там же*, с. 382-388.
- 18) A. Cunningham, *Some account of the life and work of Sir Walter Scott*, Boston, 1832.

- 19) И. И. Панаев, с. 59.
- 20) Н. В. Гоголь, *Об архитектуре нынешнего времени.* // Н. В. Гоголь, *Соб. соч. в 7 томах*, М., 1967, т. 6, с. 86.
- 21) Е. Пэркхедд, 20頁。
- 22) 同書, 121頁。
- 23) А. А. Бестужев-Марлинский, т. 2, с. 596.
- 24) А. А. Бестужев-Марлинский, т. 1, с. 326.
- 25) А. С. Пушкин, *Пол. соб. соч.* Изд. Академии Наук СССР, Л., 1937-1959, т. 13, с. 121.
- 26) А. С. Пушкин, т. 15, с. 193.
- 27) А. С. Пушкин, т. 16, с. 49.
- 28) *Там же*, с. 51.
- 29) Н. В. Гоголь, т. 7, с. 156.
- 30) *Там же*, с. 161.
- 31) Н. В. Гоголь, *Шлецер, Миллер и Гердер* // Н. В. Гоголь, *Соб. соч. в 7 томах*, т. 6, с. 110-111.
- 32) В. Г. Белинский, *О жизни и произведениях сира Вальтера Скотта (Сочинение Аллана Каннигама. Перевод Девуцы Д....)* // В. Г. Белинский, *Пол. соб. соч.*, Изд. Академии Наук СССР, М., 1953, т. 1, с. 342-346.
- 33) В. Г. Белинский, *История Малороссии (Николая Маркевича)* // В. Г. Белинский, *Пол. соб. соч.*, т. 7, с. 44-65.
- 34) В. Г. Белинский, *Романы Вальтера Скотта (Том третий, <Антикварий>)*. // В. Г. Белинский, *Пол. соб. соч.* т. 9, с. 283-284.
- 35) マルリンスキイの文学, 及び, ベリンスキイとフランス熱狂派, マルリンスキイ, ドストエフスキイの関係については, 拙稿がある。
 - ・「А. ВестуэджэФ=マルリンスキイとその小説——1830年代のロシア作家達より」, 『RUSISTIKA』2号, 1982年。
 - ・「フランス・ローマン主義とドストエフスキイ」, 『ロシアとポーランドにおけるローマン主義の成立と相互影響』(文部省科研報告書), 1983年。
- 36) 『現代の英雄』の「公爵令嬢メリイ」の章に, 主人公ペチョーリンが決闘の前夜, 不安をやり過ごすために, スコットの *Old Mortality* (1816) (ペチョーリンが手にするのはロシア語訳の *Шотландские пуритане*) を開く場面がある。彼は最初はいよいよ読んでいたが, やがて, 作品の **волшебный вымысел** に夢中になってしまう。この, ペチョーリンの印象についての (そして, 作家レールモントフの目をも感じさせる) **волшебный вымысел** という表現は, (先に引用した) ベリンスキイのスコット理解に通じるものであり, 興味深い。

См.: М. Ю. Лермонтов, *Соб. соч. в 4 томах*, М., 1965, т. 4, с. 111.
- 37) M. Slonim, *The epic of Russian literature (From its origins through Tolstoy)*, New York, 1969, p. 162.
- 38) *Ibid.*, p. 139.

- 39) И. И. Панаев, с. 57.
- 40) См.: Н. Котляревский, *Декабристы, Кн. А. И. Одоевский и А. А. Бестужев-Марлинский*, С.-Петербург, 1907, с. 331.
- 41) なお、以上触れたもの以外に、当時のロシア読書界、ロシア文壇にスコットが及ぼした影響に関するまとまった言及としては、下記のものに興味深い。
- ・ В. Н. Майков, *Вальтер-Скотт — М. Н. Загоскин. // Сочинения В. Н. Майкова в 2 томах*, Киев, 1901, т. 1, с. 115-150.
 - ・ А. Григорьев, *Вальтер Скотт и новые струи. // А. Григорьев, Воспоминания*, Л., 1980, с. 76-82.
- 42) См.: Л. П. Гроссман, *Семинарий по Достоевскому (Материалы, библиография и комментарии)*, М.-Петроград, 1922, с. 23, 33, 34.
- 43) ドリーニン編『ドストエフスキー、同時代人の回想』水野忠夫訳、河出書房、1966年、32頁。
- 44) 同書、32-33頁。(以下引用に際し、一部作家名、作品名表記を変更した。)
- 45) 同書、41頁。
- 46) 同書、65頁。(なお、既に指摘されているように、『アヘン常用者の告白』は実際はトーマス・ド・クインシーの作品である。)
- 47) Ф. М. Достоевский, *Письма в 4 томах*, т. 1, с. 77.
- 48) Ф. М. Достоевский, *Пол. соб. соч. в 30 томах*, т. 2, с. 116.
- 49) V. Terras, *The Young Dostoevsky (1846-1849)*, The Hague · Paris, 1969, p. 187.
- 50) Ф. М. Достоевский, *Пол. соб. соч. в 30 томах*, т. 2, с. 122.
- 51) *Там же*, с. 122.
- 52) *Там же*, с. 236.
- 53) Ф. М. Достоевский, *Письма в 4 томах*, т. 4, с. 222.
- 54) *Там же*, с. 196.
- 55) ドストエフスキイは子供に対してのみならず、時として、大人にもスコットの作品を薦めた。例えば、彼の妻アンナは、1867年10月16日の日記の中で、〈自分のかわりに図書館へ寄って何か借りてきてくれるよう、夫に頼んだところ、彼はウォルター・スコットの『ミドロジアン的心脏』とジョルジュ・サンドの『緑色の婦人達』を借りてきた〉と記している。
- Ф. М. Достоевский, *Новые материалы и исследования (Литературное наследство, 86)*, М., 1973, с. 246.
- 56) А. Григорьевは、〈このようなスコットの歴史小説の影響によって、カラムジン以来の誤ったロシア史理解が助長され、現実とは無縁のロシアの姿がザゴスキンの等の作品の中に登場するようになった〉と批判している。
- cf. : W. Dowler, *Dostoevsky, Grigor'ev, and Native Soil conservatism*, Toronto, 1982, p. 85.

Вальтер Скотт и русская романтическая литература

Митико КАНАДЗАВА

В начале 7-ой главы незаконченного романа "Неточка Незванова," одного из ранних произведений Ф. М. Достоевского, мы встречаем любопытную сцену. В домашней библиотеке, героиня Неточка Незванова, нервная, чувствительная девочка, открыла книгу "Сен-Ронанские воды" (St. Ronan's well) Вальтера Скотта и нашла длинное любовное письмо к Александре Михайловной.

В 20-30х годах 19-го века, в библиотеке русского интеллигентного семейства, обыкновенно, встречались собрания сочинений В. Скотта. Автор настоящей статьи, читая вышеуказанную сцену "Неточки," задумал исследовать роль В. Скотта в русской литературе первой половины 19-го века. Автор, в данной работе, исследует то, как тогдашняя публика любила произведения Скотта, и выясняет влияние его на русских писателей, особенно Достоевского.

I В. Скотт и его время

Вальтер Скотт (1771-1832), шотландский писатель, вначале творил как поэт. Три его самых известных красивых поэмы - "Поэма последнего борца" (The Lay of the Last Minstrel), "Мармион" (Marmion), "Красавица озера" (The Lady of the Lake) очаровали читателей и сделали его популярным поэтом. Однако, с тех пор, как вышла книга Байрона "Паломничество Чайльд-Гарольда" (Childe Harold's Pilgrimage), Скотт постепенно терял популярность. Поэтому Скотт начал писать прозаические произведения, и его первый роман "Уоверли" (Waverley) разошёлся очень хорошо. Прозаические произведения Скотта имели больший успех, чем его поэмы, и сделали его знаменитым не только в Англии, но и в зарубежных странах. В особенности, во Франции его произведения оказали большое влияние на многих писателей (Бальзак, Мериме, Гюго, Жорж Санд . . .). В произведениях Скотта, имеющих романтическую окраску, описываются разные средневековые события. Он считается создателем "исторического романа,"

II Воспоминания И. И. Панаева о популярности В. Скотта

В 1820х-30х-40х годах, в России В. Скотт был одним из самых популярных писателей. И. И. Панаев, в его известных "Литературных воспоминаниях," пишет следующее:

С пятнадцатилетнего возраста у меня развилась страсть к чтению и литературе. Я с жадностью и приятным трепетом перечитывал все тогдашние альманахи, особенно “Северные цветы”; романы Вальтер-Скотта; главы “Онегина” <...> Украдкой от начальства, под видом повторения уроков, мы таким образом каждый вечер сходились в классе читать романы Вальтер-Скотта или “Телеграф.”

(И. И. Панаев, Литературные воспоминания, М., 1988, с.34.)

Знакомство русской публики с произведениями Скотта началось в 1810-х годах. И в 20х-30х-40х годах его произведения, переведённые с английского языка на русский, или на французский, печатали в газетах и журналах, одно за другим. Вышеупомянутый роман “Сен-Ронанские воды” вышел в конце 1823 года в Англии, и уже в 1824 году продавали его французский перевод в Москве и Петербурге.

О популярности Скотта Гоголь пишет в сборнике “Арабески” :

Вальтер Скотт первый отряхнул пыль с готической архитектуры и показал свету все ее достоинство. С того времени она быстро распространилась. В Англии все новые церкви строят в готическом вкусе.

(Н. В. Гоголь, Соб. соч. в 7 томах, М., 1967, т. 6, с. 86.)

То есть, средневековые события и неизбежно связанные с ними готические понятия — замок, могила, монастырь, призрак, суеверие и т. д. — обрадовали читателей.

III Влияние на Бестужева-Марлинского, Пушкина, Гоголя, Белинского

Что касается писателей, то они не только наслаждались произведениями Скотта, но и внимательно рассматривали их и подражали им, используя приёмы Скотта. А.А. Бестужев-Марлинский, под влиянием Скотта, написал романтические произведения, в которых часто изображены сверхъестественные события. Из тогдашних английских писателей он больше всех любил Байрона и Скотта, и высоко оценивал музыкальность романа Скотта.

Пушкин никогда не был подражателем Скотта. Но он тоже любил работы Скотта и считал его мастером романа. Пушкин не раз касается Скотта в письмах к молодой жене.

Скучно, мой ангел. И стихи в голову нейдут; и роман не переписываю. Читаю Вальтер-Скотта и Библию, а всё об вас думаю.

(А. С. Пушкин, Пол. соб. соч. Изд. Академии Наук СССР, Л., 1937-1959, т. 15, с. 193.)

Я взял у них Вальтер-Скотта и перечитываю его. Жалею, что не взял с собою английского. (А. С. Пушкин, Пол. соб. соч., т. 16, с. 49.)

Веду себя скромно и порядочно. Гуляю пешком и верхом, читаю романы В. Скотта, от которых в восхищении, да охаю о тебе.

(А. С. Пушкин, Пол. соб. соч., т. 16, с. 51.)

Гоголь интересовался историей. Как известно, в сентябре 1823 года, в Петербургском университете, он читал лекции по средневековой истории и его лекции произвели глубокое впечатление на слушателей. Он также признался в письме к М.П. Погодину, что он, занимаясь первой частью “Мёртвых душ,” принимает “перечитывать вновь всего Вальтера Скотта”.

(Н. В. Гоголь, Соб. соч., т. 7, с. 156.)

Кроме интереса к истории, двух писателей (Гоголя и Скотта) объединяло ещё и другое. Это — экзотика. Говоря подробнее, Украина, где Гоголь родился и которую он изображал в произведениях, пленила русскую публику своей романтической, фантастической экзотичностью так же, как Шотландия Скотта пленила английскую публику.

Проницательный критик Белинский неоднократно рецензировал работы Скотта. В длинной статье “О жизни и произведениях сира Вальтера Скотта (Сочинение Аллана Каннигама. Перевод Девиды Д...),” он писал:

Кто не знает созданий этого громадного и скромного гения, который был литературным Колумбом и открыл для жаждущего вкуса новый, неисчерпаемый источник изящных наслаждений, который дал искусству новые средства, облек его в новое могущество, разгадал потребность века и соединил действительность с вымыслом, примирил жизнь с мечтой, сочетал историю с поэзией?

(В. Г. Белинский, Пол. соб. соч., Изд. Академии Наук СССР, М., 1953, т. 1, с. 342.)

Так или иначе, многие русские литераторы, которые обычно читали романы Скотта на русском или французском, заметили общую черту между произведениями Скотта, в которых давалось романтическое изображение страстей человека, и новой французской литературой “*École frénétique*.”

IV Восприятие Скотта Достоевским (1)

В “Библиотеке Достоевского” под редакцией Л. П. Гроссмана, приведены четыре произведения Скотта — “Перфская красавица или день святого Валентина” (*The Fair Maid of Perth*), “Монастырь” (*The Monastery*), “Уоверли,” “Айвенго” (*Ivanhoe*). Уже с детства Достоевский интересовался историей и историческим романом. Об этом глубоком интересе к Скотту свидетельствовали его младший брат Андрей, его друг Григорович и другие. Кроме четырёх вышеупомянутых книг, Достоевский читал много романов Скотта, например, “Гай Маннеринг” (*Guy Mannering*), “Эдинбургская темница” (*The Heart of Midlothian*).

Достоевский любил больше всего фантастический мир исторического романа Скотта. В раннем произведении “Белые ночи” герой Мечтатель разъясняя Настеньке сущность натуры мечтателя говорит:

Вы спросите, может быть, о чем он мечтает? К чему это спрашивать! Да обо всем. . . об роли поэта, сначала не признанного, а потом увенчанного; о дружбе с Гофманом; Варфоломеевская ночь, Диана Вернон, героическая роль при взятии Казани Иваном Васильевичем, Клара Мовбрай, Евфия Денс, собор прелатов и Гус перед ними, восстание мертвецов в Роберте (помните музыку? кладбищем пахнет!), Минна и Бренда, сражение при Березине, чтение поэмы у графини В-й-Д-й, Дантон, Клеопатра *ei suoi amanti*, (.)

(Ф. М. Достоевский, Пол. собр. соч. в 30 томах, Л., 1972, т. 2, с. 116)

Эти три героини - героиня "Роб Рой" (①), героиня "Сен-Ронанских вод" (②), героиня "Эдинбургской темницы" (③) - вместе с вышеупомянутыми другими лицами создают фантастическое воображение Мечтателя. Достоевский, как нам кажется, понимал то, что в романе Скотта историческое событие часто является не действительным, а вымышленным.

V Восприятие Скотта Достоевским (2)

Достоевский отмечал "высокое воспитательное значение" в романах Скотта. В повести "Белые ночи" Настенька образовывалась с помощью сочинений Скотта, и героиня "Неточки" - с помощью "Айвенго." Далее, и в письмах к читателям "Дневника писателя" Достоевский усердно рекомендовал им давать своим сыновьям и дочерям произведения Скотта для чтения. Вероятно, он высоко оценивал два воспитательных действия произведений Скотта, развивающихся ум и чувствительность молодых людей. Первое действие способствовало развитию воображения, и второе приводило воображение в порядок.

Иначе говоря, Достоевский понимал у Скотта не просто любовь к сверхъестественности, но и объективный взгляд на эту любовь. Достоевский видел в этом многосторонность и историческое значение В. Скотта.